

令和3年度

美術部



発行責任者 県中学校教研究会美術専門部長

浅野 太平

事務局 福島市南平5-8

福島市立福島第四中学校 木島 克典

福島県中学校教育研究会美術専門部

部長あいさつ

県中教研美術専門部長 福島市立福島第四中学校 浅野 太平

今年度、福島県中学校研究協議会県北・相双大会が、書面ではありましたが実施できましたことをうれしく思います。コロナ禍により中止となった昨年度から、必死の思いで一歩前に踏み出した前例のない大会でしたが、本会の不屈の精神を感じさせられる大会でもありました。

今年度の研究は、研究主題「造形活動を通し、多様な価値観や豊かな創造力を育むことで、自己実現の喜びを味わわせる美術教育はどうすればよいか。」のもと3年次副主題「自己実現に向かう心を育てる手立ての工夫」について継続研究となりました。

美術専門部では、生徒が自己の内面を造形表現し、作品の完成によって得られる小さな自己実現が生きる力を育むための重要な学びであると捉え、これまで研究を重ねて参りました。主題を通して自己と向き合い構想をまとめ、既習事項と新たに知り得た学びを駆使し、成功と失敗を繰り返しながら作品を完成させる。こうして生まれた作品は、まさに自己の内面を可視化した、心を映し出す鏡です。作品と向き合うことは、自分自身との新たな出会いとなり、自己を見つめ直し、これからの生き方を考える貴重な体験であります。この小さな自己実現は、自己の願いや思いを具現化するプロセスを学ぶ掛け替えのない経験となり、その積み重ねは、美術を愛好する心情を育てると同時に、生涯にわたる自己実現を希求する生き方を身に付けるものと考えます。

結びになりますが、県大会運営に多大なご尽力をいただいた県北・相双大会実行委員会各位、資料をご提供いただいた県内各支部正会員各位、そして貴重な授業を提供して下さった福島市立岳陽中学校の森山敦先生、福島市立福島第二中学校の野地恵美子先生に深く感謝申し上げますとともに、コロナ禍が一刻も早く収束し、本研究会がますます発展充実することを願いあいさついたします。

令和3年度 県中教研美術専門部組織

美術部専門部役員

部 長	浅 野 太 平	福 島 四 中
副 部 長	横 田 勝 秋	富 田 中
	伊 達 東	湊 中
	佐 藤 恭 司	石 神 中

事務局

総 務	木 島 克 典	福 島 四 中
	近 藤 憲 人	蓬 萊 中
庶 務	國 島 篤	信 陵 中
	丹 野 敦 美	川 俣 中
会 計	佐 藤 純 子	信 夫 中

常任研究員・編集委員

福 島	廣 川 豪	附 属 中
伊 達	中 島 洋 幸	伊 達 中
伊 達	玉 上 英 美	釀 芳 中
郡 山	大 橋 宏 記	行 健 中
郡 山	渡 部 信 幸	郡 山 一 中
郡 山	木 村 麗 子	緑 が 丘 中
東西しらかわ	田 上 陽 子	泉 崎 中
い わ き	吉 野 晃 一	玉 川 中
郡 山	馬 場 朝 子	大 槻 中
岩 瀬	小 西 吾 郎	須賀川二中

美術専門部各支部長

福 島	浅 野 太 平	福 島 四 中
伊 達	中 田 幸 司	桃 陵 中
安 達	武 藤 淳	本 宮 一 中
郡 山	横 田 勝 秋	富 田 中
岩 瀬	遠 藤 彰	須賀川二中
石 川	山 口 功 二	石 川 中
田 村	新 田 勇 雄	三 春 中
東西しらかわ	相 馬 慶 二	鮫 川 中
北 会 津	伊 達 東	湊 中
耶 麻	武 藤 幸 意	塩 川 中
両 沼	塚 原 直 樹	新 鶴 中
南 会 津	佐 藤 謙 二	舘 石 中
相 馬	佐 藤 恭 司	石 神 中
双 葉	長 谷 川 淳	双 葉 中
い わ き	西 田 英 実	湯 本 二 中

福島県生徒造形作品研究会 および秀作審査会に参加して

伊達市立桃陵中学校 中田 幸司

久しぶりに県中学校生徒造形作品研究会および秀作審査会に参加させていただいた。遠方の先生方との再会。「テーマは?」「参考作品は?」「素材は?」「技法は?」などと様々な声。会場では、あちらこちらで情報交換が行われている。生徒の作品を目の前にして、初めて会う先生方とも気軽に語り合える雰囲気は、いつ来てもワクワクして心地よい。

美術教師になりたての頃、各支部から選出された作品に目を見張った。先輩の先生方の話に耳を傾けた。「自分の指導に生かせることはないか!」と思いながら。各地域の特色のある作品が多く出品されていた。今も以前と変わっていない。

今回出品された作品の素材は、ガラス、金属、粘土、焼き物、革、和紙、流木、藤など様々なものが見られ、先生方の題材設定や素材の工夫が伺える。さらに、写真やCGを活用した作品も見られた。いつになっても刺激を受ける。どのように指導したのだろうか。

多くの学校では、美術教師は一人。学校によっては美術教師が不在だ。また、コロナ禍である現在、タブレットを使った遠隔授業を模索している。これからの美術教育はどのように変わっていくのだろうか。これからも、県中学校生徒造形作品研究会および秀作審査会で、各地区の美術教師が課題を共有し、ともに学び合えることを大切にしたいと思う。この会に参加し、大変有意義な時間を過ごすことができた。

立体の部 審査を終えて (立体の部審査担当)

郡山市立大槻中学校 馬場 朝子

多くの美術教師が各中学校に一人だけの状況で勤務されている中、県中学校生徒造形作品研究会・秀作審査会は多くの実践に触れることができる貴重な機会である。私自身、初任からずっと美術教員が1名の状況で勤務してきた。はじめの数年間はまだ暗黒模索。当時の県造形展で教科書に載る様な立派な作品を拝見し、その指導者の先生方は美術の神様に見えた。終わる頃には、会場の作品に圧倒され、自分の指導力のなさに落胆し、自信を無くして山奥の所属校に帰った……。

今年の県造形展で初めて、工芸の部の審査で進行をさせていただいた。美術の神様の集いでの進行は恐れ多く、震え上がるような緊張だった。今まで運営をしてこられた諸先生方に教えていただきながら、会場の先生方に協力していただき、無事に審査を終えられたことに深く感謝している。立体分野の題材には先生方のアイデアや試行錯誤、いわば企業秘密が詰まっている。今年の審査では、指導者の先生に質問した際、材料の入手方法や、技法などを分かりやすく教えて下さる一コマもあり、大変有難かった。

これから美術教師になる若者は、東日本大震災やコロナの影響下で学生時代を過ごした若者達である。採用されてからも多くの経験不足と戦わなければいけないはずだ。県の造形展が作品の優劣を競う場ではなく、気軽に質問でき、先生方が教え合いやすく、多くのお土産が学べる会になればと思う。



平面の部 審査を終えて (平面の部審査担当)

郡山市立行健中学校 大橋 宏記

平面審査進行を担当させていただき、選りすぐりの生徒作品を鑑賞できることは、美術を教える身としては貴重な時間でした。今回の絵画の作品で印象的であったのは、高い技術で描かれているだけでなく、生徒の心情がどうしてもなくはち切れんばかりに表現されている作品群が見られたことです。幸いに担当された先生から、生徒の内面からわき出る表現であったとの話を聞くことができました。また表現することで成長、深化、安定など変容が見られた話からは美術が生徒にとってかけがえない時間であると再認識させられました。また、話題となったのは制作過程の中の写真の活用についてでした。デジカメの普及により自画像や風景画などで積極的に活用されているのが昨今の流れであります。写真を活用する中で、写真ではおさまりきれない生徒の制作欲求をどう絵画制作へつなげればよいか工夫を凝らしていきたいという話が上がっていました。iPad等のタブレットが急に導入され、美術の制作で作品や指導過程での活用方法もこれからの課題であります。生徒の発想や表現が活性化し、尚且つ指導の負担を軽減していけるような知恵をみんなで集めていければと思いました。





令和4年度からの研究主題について

美術部総務 福島市立福島第四中学校 木島 克典

1 研究主題

「多様な見方や感じ方を深め、心豊かに創造する力を育む造形活動はどうすればよいか。」

○ 令和4年度副主題

「造形的なスキルを身に付けさせる工夫」

○ 令和5年度副主題

「多様な価値観を育む指導の工夫」

○ 令和6年度副主題

「美術の広がり」と自己実現」

2 これまでの研究経過

平成30年度～令和3年度は、研究主題「造形活動を通し、多様な価値観や豊かな創造力を育むことで、自己実現の喜びを味わわせる美術教育はどうすればよいか。」のもと研究が進められた。この研究主題は、平成27年度からの研究主題「生徒一人一人に自己実現の喜びを味わわせ、豊かな生活を創造していこうとする態度を育てる美術教育をどうすればよいか。」を基本的に踏襲しながら「自己実現」の捉えを、単に自己の内面的な向上などにとどまるのではなく、身の回りの生活の改善や社会への提言などを意識した、よりグローバルな目標とし、人々の価値観の違い、多様な表現のおもしろさなどを知らず、社会への発信に耐え得る表現技術の向上などを目指して研究が進められた。

県中学校生徒造形作品研究会及び秀作審査会では、生徒個々の思いを今までの表現様式にとらわれない様々な表現方法や目新しい素材で表した斬新な作品が多く見られ、多様な価値観の理解のもと自己実現に迫らせようとする県内各地の先生方の実践が確認された。

3 令和4年度の研究の内容と方法

令和4年度からの新たな研究主題は、新学習指導要領の全面実施をふまえ、「美術科は何を学ぶ教科なのか」ということが研究を進めていく中で明確になっていくような主題となるよう配慮した。

学習指導要領改訂の経緯においては、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要」と述べられている。本主題の「多様な見方や感じ方を深め」の部分はまさにここで言われている「感性」を磨き、働くものにしていくことに主眼をおいてい

る。後半の「心豊かに創造する力を育む造形活動はどうすればよいか」は、造形活動を通してよりよい社会と人生を創っていくことにつながっている。

このように、新学習指導要領に密接に結びつく研究主題を通して美術の良さ、強みを指導する教師がしっかりととらえられるようにしていきたい。

令和4年度は、副主題「造形的なスキルを身に付けさせる工夫」のもと、生徒一人一人が自分の思いを表出できる力、自分に必要な情報を取り入れることができる力を高める指導を工夫されたい。

(1) 研究内容

- ① 身に付けさせたい造形的スキルについて
- ② 造形的スキルを身に付ける題材について
- ③ 1人1人がスキルを身に付ける指導・支援の工夫について
- ④ 身に付けた造形的スキルの生かし方について
- ⑤ 生徒の変容の把握と評価の工夫について

(2) 研究方法

- ① 生徒の実態、地域・社会のニーズの把握
- ② 様々な実践事例の収集・分析
- ③ 研修や美術教師同士の情報交換
- ④ 鑑賞活動・言語活動の工夫
- ⑤ 生徒の活動の記録方法の工夫・蓄積

4 参考資料

- 中学校学習指導要領 (文部科学省)
- 中学校学習指導要領解説美術編 (文部科学省)

令和4年度中教研美術部事業計画(案)

実施時期	事業(会議名等)	場所等
4月	各支部専門部総会	各支部
5月19日(木)	県専門部総会 主題研修会	福島市
5月下旬	県主題研修会報告会	各支部
7月下旬	支部研究協議会	各支部
7月29日(金)	美術ゼミナール	郡山市
10月6日(木)	県研究協議会 会津大会	喜多方市
10月下旬	県研究協議会報告会	各支部
11月下旬まで	地区造形作品審査会	各支部
12月2日(金)	県造形作品研究・審査会	郡山市
1月～2月	支部専門部長会	郡山市
2月末日まで	部報発行	福島市